- (29) Smith & Wilson, p. 473
- (30) Johnson, p. 66
- (31) Long, p. 202
- (32) Simpson, p. 136
- (3) Ridout & Witting, p. 112
- (34) Johnson, p. 51
- 35) Ridout & Witting, p. 137
- (36) Long, p. 299
- (37) 『ことわざ大辞典』p. 1237
- (38) Johnson, p. 52
- 39 Ridout & Witting, p. 588
- (40) Long, p. 278
- (41) *Ibid.* p. 289
- 42) Paul Proctor (ed.), Longman Dictionary of Contemporary English (Longman, 1978) p. 1006
- 43 F.G. Fowler & H.W. Fowler (ed.), The Pocket Oxford Dictionary of Current English, Fifth Edition (Oxford Univ Press, 1969) p. 758
- 44 William Shakespeare, 2 King Henry Vl, III. i. 53-57
- 45) Ridout & Witting, p. 162
- (46) Johnson, p. 107
- 47) 大塚高信・高瀬省三編『英語諺辞典』(三省堂、1976) p. 147
- (48) Johnson, p. 33
- (49) V.H. Collins, A Book of English Proverbs (Longmans, 1963) p. 21
- 60) COD⁶, p. 104
- (51) Ridout & Witting, p. 181
- 52) Smith & Wilson, p. 869

(本学教授)

bloodとwater, milkなどがほとんどそういう区別なく使われるように至ったのではないかと 思われる。ことわざは長い間、いろいろな人達によって使われるものであるから、解釈や使 い方が少しずつ変わっていくのも至極当然のことであろう。

注

- (1) 鈴木棠三・広田栄太郎編『故事ことわざ辞典』(東京堂、1963) p. 230
- (2) 『ことわざ大辞典』(小学館、1982) p. 147
- (3) J.A.Simpson (ed.) The Concise Oxford Dictionary of Proverbs (Oxford University Press, 1982) p. 11
- (4) Thomas Hill Long (ed.) Longman Dictionary of English Idioms (Longman, 1979) p. 19
- (5) Simpson, p. 20
- (6) Ronald Ridout & Clifford Witting, English Proverbs Explained (Pan Books, 1972) p. 32
- (7) Long, p. 24
- (8) Ridout & Witting, p. 58
- (9) Long, p. 94
- (10) Simpson, p. 63
- (1) A. Johnson, Common English Proverbs, (Longman, 1971) p. 32
- (12) Long, p. 250
- (13) Ridout & Witting, p. 95
- (14) 鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波書店、1973) pp. 18-23
- (15) Ridout & Witting, p. 101
- (16) H.W. Fowler & F.G. Fowler (ed.), The Concise Oxford Dictionary of Current English, Fourth Edition (Oxford, 1952) p. 997
- (17) Ibid., Sixth Edition (1976) p. 866
- (18) 鈴木孝夫、pp. 22-23
- (19) Johnson, p. 103
- (20) Long, p. 270
- W.G. Smith & F.P. Wilson (ed.), The Oxford Dictionary of English Proverbs (Oxford, 1970) p. 663
- (2) 矢野文雄『知っておきたい英語の諺』(三友社、1980) p. 41
- (23) Johnson, p. 16
- (24) Long, p. 307
- (25) Smith & Wilson, p. 473
- 26 Ridout & Witting, p. 111
- (27) Long, p. 202
- 28 John Ray (ed.), A Complete Collection of English Proverbs (George Cowie and Co., 1813) p.

16 Yoy cannot get blood from a stone.

このことわざは辞典によって『無い袖は振られぬ』の意に解されたり、「冷酷な人から同情 は得られない」の意に解されたりしている。大塚・高瀬(1976)は「不可能事をしようとす るの意」として『氷をたたいて火を求む』ということわざを挙げている47。Johnsonも同じく 『無い袖は振られぬ』の意に解している48)。

A man who has nothing cannot pay his debts or give anything away.

The proverb is usually quoted by a person from whom money has been demanded, but who has none at all, or says he has none.

しかしCollins(1963)は次のように「冷酷な人から同情は得られない」の意に解してい る49)。

One cannot get sympathy etc. from a hard- or cold-hearted person.

そしてCOD®も同様に解し、次のように記している50)。

blood out of a stone, pity from the pitiless or money from the avaricious

さらにRidout & Wittingでは、bloodの代りにwaterも使われる場合もあることを示し、両 者を区別している51)。

Here 'blood' means human feeling and a 'stone' represents a hard-hearted person. The proverb refers to avarice; a man can be so full of greed and lust for wealth that he feels no sympathy at all for others. To ask his help is as useless as trying to get blood out of a stone. An alternative is "You cannot get water out of a stone," which has more the meaning of the futility of trying to extract money from a person who either will not pay, or has not the money to pay with.

この解説はなかなか明快であるように思われる。しかし、Smith & Wilsonが挙げている次 のような用例をみると、必ずしもこの説明のように人々は解してはいないようである52。

If these Norfork landlords have no more than their land, you may as well try to get blood out of a stone as try and make them build houses for other people's labourers.

(Augustus Jessopp, *Arcady*,1881)

そしてこの同書では、このことわざはTo get (wring) water (blood, milk) from a flint (stone).となっており、waterの代りにmilkも使われることを示している。

結局このことわざは、もともとget water from a stoneで「不可能なこと」を意味してい たのが、のちwaterの代りにbloodも使われるようになり、同情を得ることにも使われたが、

(14) Still waters run deep.

このことわざには、たいてい『浅瀬に仇浪』や『能ある鷹は爪を隠す』『空樽は音が高い』などをあてている。つまり、深い川は音を立てない。口数が少ないからといって考えが浅いとは限らない。むしろよくしゃべる人間は考えや感情が浅薄なのだ、という意味である。

しかしながら、このことわざを悪い意味にとり、「物静かでおとなしい人間は何を考えているか分らない(かえって恐ろしい)」という意味で使われることがあるから注意を要するのである。Shakespeareの『ヘンリー二世・第2部』には次のようにこのことわざの引用がある44。

Smooth runs the water where the brook is deep, /And in his simple show he harbours treason. /The fox barks not when he would steal the lamb: /No, no my sov'reign; Gloucester is a man /Unsounded yet, and full of deep deceit.

なお Silent men, like still waters, are deep and dangerous.ということわざもあり、ドイツにはDumb dogs and still waters are dangerous.ということわざがあり、イタリアにはStill waters breed worms.ということわざがある。

(15) Those whom the gods love die young.

このことわざには『美人薄命』や『佳人薄命』をあてている。これは「美人はふしあわせであったり、早死にしたりすることが多い」という意味であるが、英語のことわざのほうは、死後に現世よりよい来世がある、という信仰に基づいたものである。また若くして死ぬ人は神に召されているから幸いなのだという考えが含まれている。Ridout & Wittingには次のようにこのことわざが説明されている。65。

This springs from a belief in an after life that is better than this life. On this assumption a person who dies young is luckier than one who dies old. The gods love the young person so much that they cause him to die so as to have him with them earlier.

またこのことわざは、若くして死んだ人の近親者をなぐさめる言葉としても使われることがJohnsonに次のように書かれている46)。

The proverb is very old and was used to console friends or parents for the loss of loved ones who died when young. The suggestion is that the next world is a better place for such people than this one.

ところが現代ではこのことわざは、このような大げさな意味でなく、仕事が遅くなったときの言い訳として使われたり、仕事がなかなかうまくいかないでいらいらしている人に対して引用されたりするのである。Johnsonには次のように説明されている³⁸⁾。

The proverb is usually quoted by a person who has been blamed for slow work, or to a person who is impatient at not being immediately successful in what he tries to do.

またRidout & Wittingには次のような説明と用例がある39)。

The proverb teaches patience and perseverance. Important tasks call for a lot of hard work and take a long time to complete. Often the proverb is used as an excuse for delay.

'Haven't you finished mowing the lawn yet?' complained Mrs. Nagg.

Her husband mopped his brow with his handkerchief.

'Give me time, he answered. 'Rome wasn't built in a day.'

またLongによれば、このことわざは『急いては事を仕損ずる』にも近い意味を持つことがわかる。次のような説明がある40)。

a job cannot be done properly if it is done too hastily

(13) Seeing is believing.

このことわざには例外なく『百聞一見にしかず』をあてている。しかしこの日英のことわざの間にもニュアンスのズレがある。日本のことわざは「100回聞くよりも1回自分の目て見たほうが確実だ」の意で『論より証拠』に等しいわけであるが、英語のことわざは「信じるためには実際に目で見なくてはならない。見るまでは信じるな」という意味合いが強いのである。Longには次のようにある41)。

only what is actually seen can be believed to be real or true

Proctor (1978) には次のようにある⁴²⁾。

infml a. I'll believe it when I see it, and not before b. Now I've seen it, so I believe it

またPOD⁵ (1969) には"esp. as refusal to accept hearsay"と記してある。⁴³⁾

つまり、人が試験に合格したという知らせを発表前に電話で受けたような場合に、正式な発表を見るまでは信じられない。Seeing is believing.というように使うわけである。

(10) One man's meat is another man's poison.

このことわざはふつう「甲の薬は乙の毒」という言葉で説明されている。しかしこのこと わざは食べ物についてのみ言っているのではなく、すべて人の好みというものは異なるもの だという意味で多く使われるようである。Ridout & Wittingには次のような説明と用例が出 ている³³⁾。

Food that agrees with one person may have an injurious effect on another. In a wider sense one person may like what another hates.

'My sister loves cowboy films on TV, but I can't stand them.'

'Don't forget the old saying, 'One man's meat is another man's poison.'

つまり Tastes differ.や There is no disputing about tastes. などと同意なのである。

(11) Out of sight, out of mind.

このことわざは日本では常に『去る者は日々に疎し』と解されてきた。またほとんどすべての辞典がこの日本のことわざを相当するものとして挙げている。実際Johnsonには'Absent friends are soon forgotten.'という説明がなされている 34)。しかしこのことわざは、人についてのみならず物についても使われるのである。Ridout & Wittingには次のように出ている 35)。

We cease to worry about anything that can no longer be seen. This includes people. Absent friends are soon forgotten.

またLongには次のようにあり、特に人についての言及がない36)。

something that is not seen is soon forgotten

つまり、手紙を途中でポストに入れようと思っているときなどに、カバンの中に入れてしまうとつい忘れてしまうので、手に持っていようといったようなときに"Out of sight, out of miud."と言うわけである。

(12) Rome was not built in a day.

このことわざの訳「ローマは一日にして成らず」は日本のことわざを集めたたいていの辞典にも見出しとして載せてある。『ことわざ大辞典』には次のように説明されている³プ。

偉大なローマ帝国も、永い間にわたっての努力によって次第に築かれたのである。いかなる事業も、長い間の努力なしに成しとげることはできないというたとえ。

& Wittingには次のような説明と用例が出ている²⁶⁾。

The saying in often used in a half-humourous way, as if with a shrug of shoulders.

'I bought some walnuts from a barrow-boy in East Street, and when I got them home and cracked them open, nearly all of them were bad.'

'Ah, well. We live and learn.'

またLongには次のような説明と用例がある²⁷⁾。

(used as an expression of surprise when one learns something new): I had no idea that she was as old as that. Well, you live and learn.

このことわざはこのようにWe [You] live and learn.の形で使われることが多く、「人生に はいろいろなことがあるさ」とか「こいつは驚いた」といった感じで使われるのがふつうの ようであり、「人は一生が勉強」とか「学問は一生の宝」のように訳すと大分ニュアンスが違っ てしまうのである。

(9) Live and let live.

このことわざにはふつう『世は相持ち』『人は相持ち』を当てている。たしかにこのような 意味に使われることもあり、また古くは主にこのような意味で使われることが多かったよう である。Ray(1813)にはこのことわざの意味の説明としてDo as you would be done by.と いうことわざが挙げられている。28)またSmith & Wilsonには次のような例が出ている29)。

Napoleon had no conception of the maxim 'Live and let live.' His commercial ideas were narrowly national.

Johnsonにも次のようにある30)。

Do not harm others in any way and then they will not harm you. Live at peace with others.

しかしながら、現代ではこのことわざは「他人のことに干渉せず'人は人、自分は自分'で やっていけ」の意味で使われることが多いようである。Longには次のような説明がみえる。³¹)

be concerned with one's own affairs and let other people govern their affairs and live as they wish

そしてSimpsonには次のような用例が出ている。32)

Not that Sari cared two hoots how other people conducted their private lives. Live and let live.

実際にこのことわざが使われた用例も、Smith & Wilson (1970) によると、古いものには、良いことが重なる例が見られるが、新しい用例はあまりないようである²¹⁾。また英米作家によることわざの用例を集めている矢野 (1980) も「目下のところ、用例も不幸に続いて見舞われる場合のものしか集まっていない」と言っている²²⁾。

やはり、It never rains but it pours.ということわざは、たいていの場合、悪いことの連続に使われるのであろう。そして現代においては特にその傾向が強いと言えるように思われる。したがって相当する日本のことわざも、『一度あることは二度ある』や『二度あることは三度ある』とむりにせずに、従来通り「泣き面に蜂」や『弱り目に崇り目』などとしたほうがむしろ近いと言えよう。

(7) It takes all sorts to make a world.

このことわざには『世はさまざま』や『鈍智貧福下戸上戸』などを当てはめるのがふつうである。たしかに「この世には身体も知能も性格もそれぞれ異なるさまざまな人間がいる。だから心を広く持って、あらゆる人の存在を認めよ」といった意味で、大体同じなのであるが、実際にはこの英語のことわざは、風変りな人間がいたときや、自分と意見が異なる人間がいたときなどに「世の中には時には変った奴もいるさ」といった気持で引用されることが多いのである。Johnsonには次のような説明がある²³⁾。

The world's population is made up of many different sorts of people. The proverb is quoted when one hears of someone else's strange behaviour or character. またLongには次のようにある²⁴⁾。

any society consists of people who vary greatly in thier characters, habits, opinions, etc. (usu. used to refer to a person who has different opinions, etc. from those of the speaker)

(8) Live and learn.

このことわざにはふつう「長生きはするもの」という訳を与えている。人は長生きすればするほど、いろいろな事を見聞きし賢くなるという意である。Smith & Wilson には Lord Aveburyの The Use of Lifeからの次の引用が出ている 25)。

No doubt we go on learning as long as we live. Live and learn.

しかしながら、特に現代では、このことわざは何か新しい経験をしたり、新しいことを知ったりしたときに、驚きの表現として、またユーモラスに使うことが多いようである。Ridout

使われるものでないことが必ず記されるようになった。実際Ridout & Wittingは次のように 説明している¹⁵⁾。

The meaning is that events, especially misfortunes, always come together.

COD* (1952) では幸不幸を区別しない解説も出ている16)。

events usu. happen several together

ただしCOD⁶ (1976) では「特に不幸が」と付記されている¹⁷⁾。

events, esp. misfortunes always come several together or in quick succession 鈴木(1973)は次のように述べている¹⁸⁾。

この諺を日本の辞典のすべてが、偏って解説してしまった原因は、はたして何であろう。 日本における初期の英和辞典製作者の誰かが、早のみこみをして、この諺の意味を取り違 えたのを、代々の辞書編纂者たちが、鵜呑みにして現在に至っているのだという意地悪い 解釈も可能かも知れない。

しかし、どこかで、誰か一人でも、自分で英国の辞典に直接当っていれば、この誤りに 気付く筈である。これが全く無かったとは考えにくい。

私はむしろ、雨、ことにどしゃぶりということばに対する、日本人が持っている潜在的な受け取り方が、この諺の解釈を、好ましくない方に限定させたのではないかと思っている。日本語には「早天の慈雨」のような雨を歓迎する表現もあるが、しかし「雨に降られる」、まして「どしゃ降りに会う」というイメージは、一般に暗くしていやなものである。雨に降られることに対する日本人の否定的な評価が、この不思議な誤解を生み出したと考えることはできないだろうか。——

しかし雨に降られることは日本人に限らずあまり快いことではないであろう。Johnsonにも次のようにこのことわざの説明がある¹⁹⁾。

Whenever it rains, it rains very heavily. Obviously it is not true, but the proverb is not to be taken in its literal meaning. Rain is usually disliked, and "whenever it rains" means "whenever mirfortunes come." The meaning of the proverb is the same as Misfortunes never come singly.

つまり同書はこのことわざが悪いことが重なる場合にふつう使われるものであるとし、『泣き面に蜂』と同じに考えてよいと言っているのである。Longも次のように、悪いことの連続にふつう使われることを示している²⁰⁾。

when troubles or unwelcome events happen they do not come singly, but arrive in great quantity

には、このような人を嘲笑するような響きはほとんどないようである。

(5) In for a penny, in for a pound.

このことわざにはたいてい『毒食わば皿まで』を対比させている。しかしこれは「いったん悪に手を染めたからには、徹底的にやりとおす」という意味である。英語のことわざは、悪事に限らず、手をつけた以上はとことんまでやれという意味である。Longには次のような説明がある¹²⁾。

if an activity is begun the work must be continued until it is brought to completion, however difficult or costly this may be.

またRidout & Wittingには次のようにある13)。

Once we have committed ourselves to some extent in an undertaking, we may as well go through with it.

つまり「乗りかかった船」のほうが近いと言える。ただし同書にはa similiar proverbとしてAs well be hanged for a sheep as a lamb.が挙げてある。昔羊や小羊を盗むと絞罪になった。同じ刑罰を受けるのなら、利益の大きい羊を盗むほうがよいという意味で、このことわざには悪いことをするというニュアンスがあるから、こちらのほうは『毒食わば皿まで』に近いと言えよう。ただしこの英語のことわざも、同書に挙げてある次の用例のように、悪事というよりは、ちょっとしたいたずらなどの時にユーモラスに使うことがあるようである。

'Dad said I was to be home from the dance by eleven o'clock, but I enjoyed myself so much that it was midnight before I realized it, so I thought I might as well be hanged for a sheep as a lamb and stopped on till the end.'

日本のことわざ『毒食わば皿まで』には次のように悪事に使われた用例がある。

「伯父御は剣術の達人でも、水にかけちゃあ徳利同様だ。川へつき落してしまやあわけのない事だ」「思い切ってそう遊ばせ。しかしその釣舟に船頭が居ませうねえ」「毒を食はば皿までだ。その船頭は切ってしまふのさ」(歌舞伎 怪異談牡丹燈籠)

(6) It never rains but it pours.

このことわざは古来日本の辞書、参考書ではほとんど常に「降ればどしゃ降り、不幸は重なるもの、泣き面に蜂」と解説されてきた。しかし鈴木 (1973) がこのことわざをとり上げい、これが必ずしも悪いことにのみ使われるものでなく、良いことが重なる場合にも使われることわざであることを強調した。そして近年出版された英和辞典類には、悪いことにのみ

う意味だけでなく、「働かずに得た金、当然以上に得た金」という意味があるからである。上述の書には、労せずして得た金をすぐ使ってしまった次のような用例が出ている。

Young Willis inherited ten thousand pounds less than two years ago, and now he hasn't a penny. Easy come, easy go.

このようにEasy come, easy go.ということわざは「努力せずに得た金はとかく浪費してしまうもの」という意味に使われることが多いようであるが、実際には金銭に限らず、「得やすいものは失いやすい」という、もっと広い意味に使われることもある。Long には次のような説明がある⁹⁾。

What was easily won, gained, earned, etc. is easily lost, spent, or wasted (often said to show that one is not worried at losing something or freely spending money).

またSimpsonには a saying as applicable to knowledge as to wealth という用例がみえる $^{10)}$ 。つまり知識についても使われることを示している。一夜漬けで暗記した知識などを試験がおわるとすぐ忘れてしまうような場合にもこのことわざが使えるわけである。

(4) Ignorance is bliss.

このことわざの出典はイギリスの詩人Thomas Gray (1716~71)の詩"Ode on a Distant Prospect of Eton College"であり、人生の悲哀や苦労も知らずに人生を謳歌しているイートンの学生達の姿を歌ったものである。Where ignorance is bliss, 'tis folly to be wise.という形でも使われる。Johnson (1971) には次のような説明がある¹¹¹。

Sometimes it is better not to know than to know. As long as a person remains in ignorance of certain events in the past, or the evil events that may happen in the future, he is likely to be happy. For instance, it is better for a person with a fatal illness not to know that he cannot recover.

このことわざに相当するものとして必ずあげられる日本のことわざ『知らぬが仏』も、本来は大体この英語のことわざと同じ意味であったようであるが、現代では、もっぱら人をひやかしたりする時に「知らぬが仏さ」などと言って使うようである。たとえば次のように使う。

この女房はうかつにも、夫が若い娘とふたりで恋の道行きをしていることに、まるで気がついては居ないのだ。知らぬが仏とはこのことだ。

(石川達三『四十八歳の抵抗』)

日本には類似のことわざに『知らぬは亭主ばかりなり』というのがある。英語のことわざ

のような解説がある3)。

Physical beauty is no guarantee of good character, temperament, etc.

またLong(1979) は次のようにこのことわざを説明している⁴。

What one recognizes as beauty in a person or thing is only the quality of its outer appearance, beneath which many very different qualities may be hidden; attractive appearances are deceptive.

(2) Birds of a feather flock together.

このことわざには必ず『類は友を呼ぶ』を当てている。しかしこの英語のことわざは人を 批難する含みで使われることが多い。Simpsonには次のようにある50。

People of the same (usually, unscrupulous) character associate together.

そしてIt is literally true in the systematised roguery of London, that 'birds of a feather flock together.'という引用例が挙げられている。またRidout & Witting (1972)には次のような記述と用例がのっている⁶⁾。

The proverb is often used about people we disapprove of.

'They're a rough crowd. Why does young Robinson have anything to do with them?' 'Birds of a feather flock togother, you know.'

Long にも"often derogatory"という注記があるっ。

日本のことわざには『類は友』『類は友を以て集まる』『類を以て友とす』などいろいろな 形があるが、いずれも特に人を批難するひびきはないようである。有吉佐和子には次のよう な引用がある。

「元気なものはボールに戯れる。おとなしいのは類が友を呼び、たむろして日なたぼっこだ。」(『げいしゃわるつ・いたりあの』)

(3) Easy come, easy go.

このことわざには『悪銭身につかず』を当てるのがふつうであるが、これは「不正な手段で得た金は、つまらない事に使ってたちまち尽きてしまう」という意味である。しかし英語のことわざのほうはRidout & Witting の説明によれば次のようにある⁸⁾。

Those who get money without effort usually squander it.

つまり、悪銭に限らず、楽をして得た金である。『あぶく銭は身につかぬ』ということわざ もあるが、このほうがむしろ当てはまると言えよう。「あぶく銭」には「不法に得た金」とい

日英ことわざの意味のズレについて

奥津文夫

英語のことわざの中には、それと全く同じ意味をもつ日本語のことわざが存在するものも多い。例えばWalls have ears.『壁に耳』Money talks.『金が物言う』Time and tide wait for no man.『歳月人を待たず』There is no smoke without fire.『火のない所に煙は立たぬ』などである。人間性というものは基本的にはそう変わりはないのであるから、これは当然のことと考えられよう。しかしながら、ことわざ辞典などで、英語のことわざと一緒にそれに相当するものとして日本語のことわざが挙げられ、一般にそれらが全く同じ意味であると考えられているような場合でも、実際には日英両ことわざの間にニュアンスのズレがあることもまた多いのである。この小論では、そのようなことわざの例を挙げて検討したい。

(1) Beauty is but skin deep.

このことわざには『美しいも皮一重』が対応するが、この日本のことわざは美人と不美人についての人間の悟りのようなものを述べたもので、鈴木・広田(1963)は次のようにこのことわざを解説しているい。

「美人も皮一枚はぎとれば、醜い女と変わらないという悟り」

また、『ことわざ大辞典』(1982) には次のようにある²⁾。

「人の心をとろけさす姿形の美しさも所詮は皮膚一枚の上でだけ。一皮むけば同じ骸骨 である」

『美は皮一重に過ぎない』とか『美人というも皮一重』とも言うが、これらも同じ意味である。

しかるに英語のことわざのほうは、美しさの下には醜さや醜い性格が隠されていることがあることを強調するもので、しかも人間だけでなく、物についても使われ、結局人や物をその外見だけで判断してはならないと言っているのである。だからAll that glitters is not gold. やAppearances are deceptive.といったことわざに近いのである。Simpson (1982) には次